



日本パルフィンガー

エプシロンM12Z105

日本パルフィンガーが初公開した「エプシロン新型Mシリーズ」は、林業用グラップルローダークレーンの全面改良モデルとなるもので、従来機に対してメカニズム・装備・操作性が大幅にグレードアップされるなど、次世代機の基準となりうるローダークレーンである。

その最大の成果が、快適な操作性だ。トップシートは、人間工学を

採り入れた形状とし、常に水平を保つサスペンション機能を標準装備する。左右のアームレストの先にはエアバス旅客機のようなジョイスティックがあり、油圧サーボによって軽く滑らかにクレーン操作できる。従来の機械式操作では味わえない操作性だが、これも標準装備だ。

そして、「EPSHOOD」は、軽量・簡素な強化プラスチック製フード



トップシート式は林業クレーンの定番スタイル。高所で外界に身を曝しながらの作業は安楽ではないが、作業面では最も広い視野を得られ、コストも低いため、根強い支持があるのも事実だ。新型Mシリーズは、その長所を保ちながら快適性を高めている。

だが、なんとこれも標準装備で、風や雨露、森の木の枝葉、虫などに全身を曝さずに済むようになる。

つまり、シンプルなトップシート式クレーンという保守的なスタイルを維持しながらも、その操作性と快適

性の質的な大幅向上を図ったのが、新型Mシリーズの特徴といえる。これは林業の労働環境改善・従事者確保でも意味があるものと思える。

メカニズムも改良されており、クレーン動作を制御するため、従来は

個々の油圧配管にそれぞれ弁機構を備えていたが、新型では油圧回路制御式に改め、配管のシンプル化・信頼性向上を図った。配管自体も、ホース使用部位を減らし、耐久信頼性を高めている。

さらに、その配管をブーム・ポストに極力内蔵することで、外部との接触・干渉を防ぐ設計とした。一方、サービスオープニング(点検口)は、より配管にアクセスしやすく設計し、メンテナンス性が改善されている。

展示機は、M12Z105と呼ばれる吊上能力104kN・ブーム最大長10.5mのZ型ブームモデルで、原木運搬フルトレの荷台全域をカバー可能なクラス随一のリーチを実現しており、クレーンとしての実力もかなり高い。次世代の林業クレーンの基準として相応しい内容をもつ1台だ。



▲トップシートからの眺め。ブーム尾端の黒いプレートは点検口カバー。◀会場ではデモ作業のほか来場者による作業体験も開催。軽い力で自在に操作できる点が好評だった。



クレーンポスト後面に油圧回路ユニットを設置。カバーにより外観もスマートである。



入念なブーム格納設計により、最低地上高が十分に確保された。

10.5mブームは、ドーリ式3軸フルトレの荷台後部までグラップルが届くことがわかる。

